柳亭種彦作
歌川國貞画

義經一代記の内

忠臣蔵

全

ヘ12
2378
100

義經一代記拔萃　文政辛巳孟春再彫

婦人義経記

東13
2378
100

柳亭種彦修辞
歌川國貞画圖

永壽堂梓

柳亭種彦修辞
歌川國貞画圖

義經一代記第一綴

婦人義経記 全

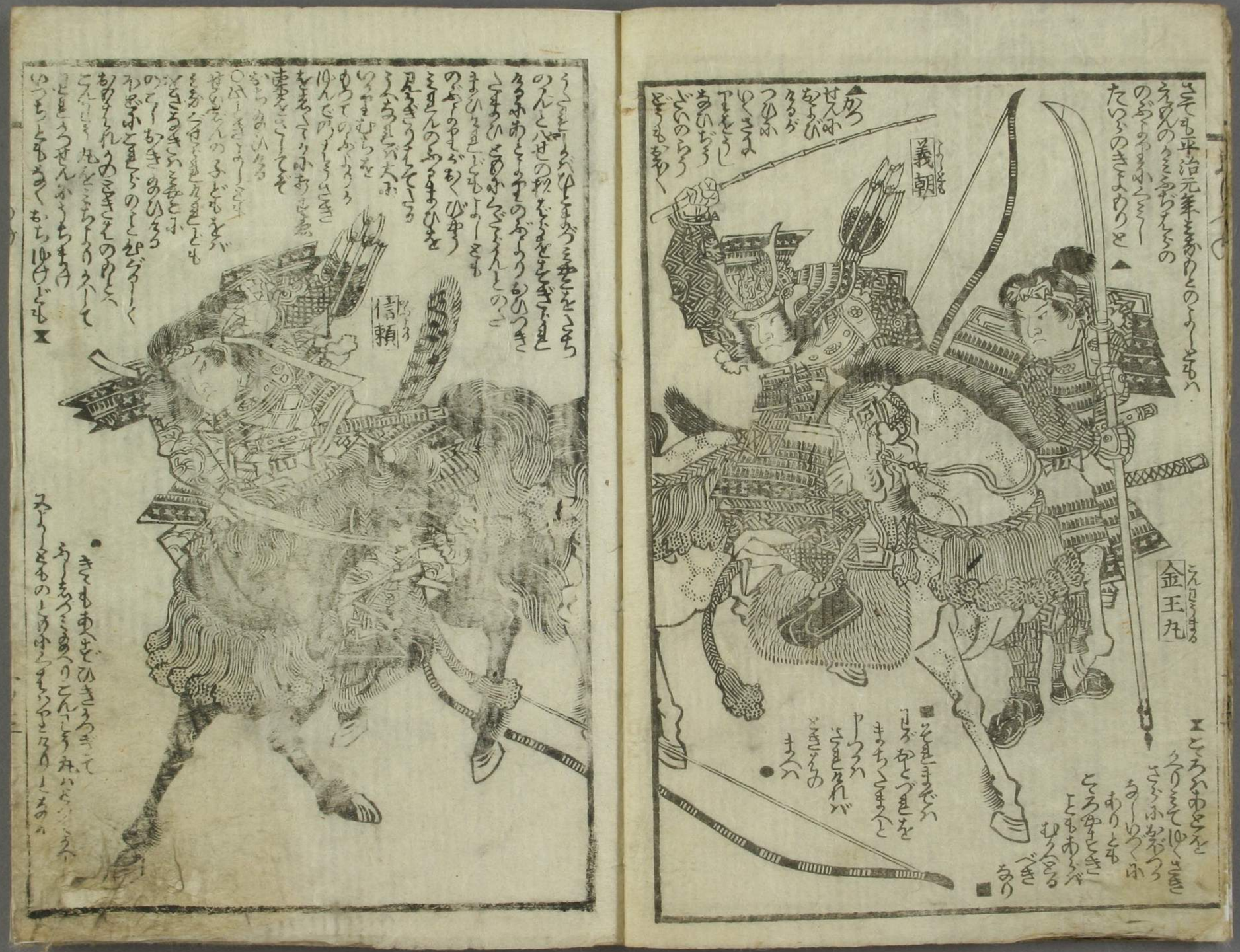
文政再版

永壽製本

源九郎
義經を小名牛若丸
鞍馬寺ゟいでて
遮那王とゝゑ
清和天皇十代の苗裔
六孫王より八代
多田滿仲が末葉
伊豫の入道頼義
が子八幡太郎義
家が孫六條判官為義が
嫡男左馬頭義朝が八男母を
九條院の雜仕常磐なり
○東鑑ゟ義朝が子八子とあるハ誤ハ又実を八男なりと

父
為朝が
称をさして
九郎と
なのるとも
附會の
説
あり

常磐御前を藤原子関白忠通女実を
太政大臣伊通の女なりかくもあるをもて
入内ゟ近衛帝ゟ御ゟ
後義朝ゟ嫁して三男を
うみ兄を今若醍醐ゟ
のがれて出家なり
悪禪師といゝハ
ちゝ兄なり中ハ乙若
八條の宮ゟ伺ゝて
卿公圓濟と名のゝ
こゝ三ゝ弟ハ則牛若なり
○舞のさゝゝゆハ梅津源左衛門が女と
あり同書ゟ常磐が小名
ろこの前とあり


義朝
信頼

牛若丸
常磐
乙若丸
○平治二年
改元あり
永暦元年
○政清あらひ
改家ゆ

金若八
金王丸

つき

たてまつるなんぜんあまのはしだてのこと

ひとすぢいづくへもかちぐやちやんとありひとつ

あれ今美のもの弟子そくいれてふれりぬき

ひろちろくわくさぎぢーろのひとをめす

年いやしやく八戈ありつぎのおくろ

六戈おてくをるおのそろきあひのき

まそくーのびびがろとそをめくを

そのそれ十二ひとりがろまのそだ

ぺーえきさ三戈ひちやすーしーしろを三五の

あひのきのごきいちめ金ひそかすく

をのうしろそーえのて五でー

わくりのそろ滝ちをまーめてるもそで

あひのあるこころのろそのとろぞ

和やまをくえ年二月十七日の

夜のとろりきまとろ

まろろんがをを

そろそろぎ

上下のじろ

ちやふうち

まぎこまきよ

ろふまわをつ

ひぐそのくーしか

つやーー

ーこをのれけを

めをあわせ八ちんのろーべと

のさまのろをのそどもををふ三人

いできくをろーこちーー平四をろ

「ろろを四の三人をいの「ーー平ハ八でー」

がそろーまをきくーろ「をめろがいろのふ

まををのろのくーををーーの「ーーろをもハ

いけのせんあつれをのかようをいのちを

ハををろのをのをろをろ

ををををを平治

ものををれ

二月八日

しをあり

ひをを義経

まをのをを

まいに

ちろをを

月十七日

をりと

ぜ八ふ

地ふつけそをくくひちろんゆをたむ

まるのおをんやまふ大月三年ふ

たををくをーーーーーたきろ

おつをびををろををきををきを

をををーーををさをををを

がくふりをきをーをあ寺をを

ろくまををろをををを九ツの

年をろ月ををろをををををを

ををを十五ふをろををををを

十八日をろ二十三ををををを

ろんをんをををををををを

ろををの年をろ▲

▲毎月ろりをきをろ三ぶ

十九の年をろ日をを

公三十三をいのをのをろを

ろーーたををろをくの

ををををんをーをのの

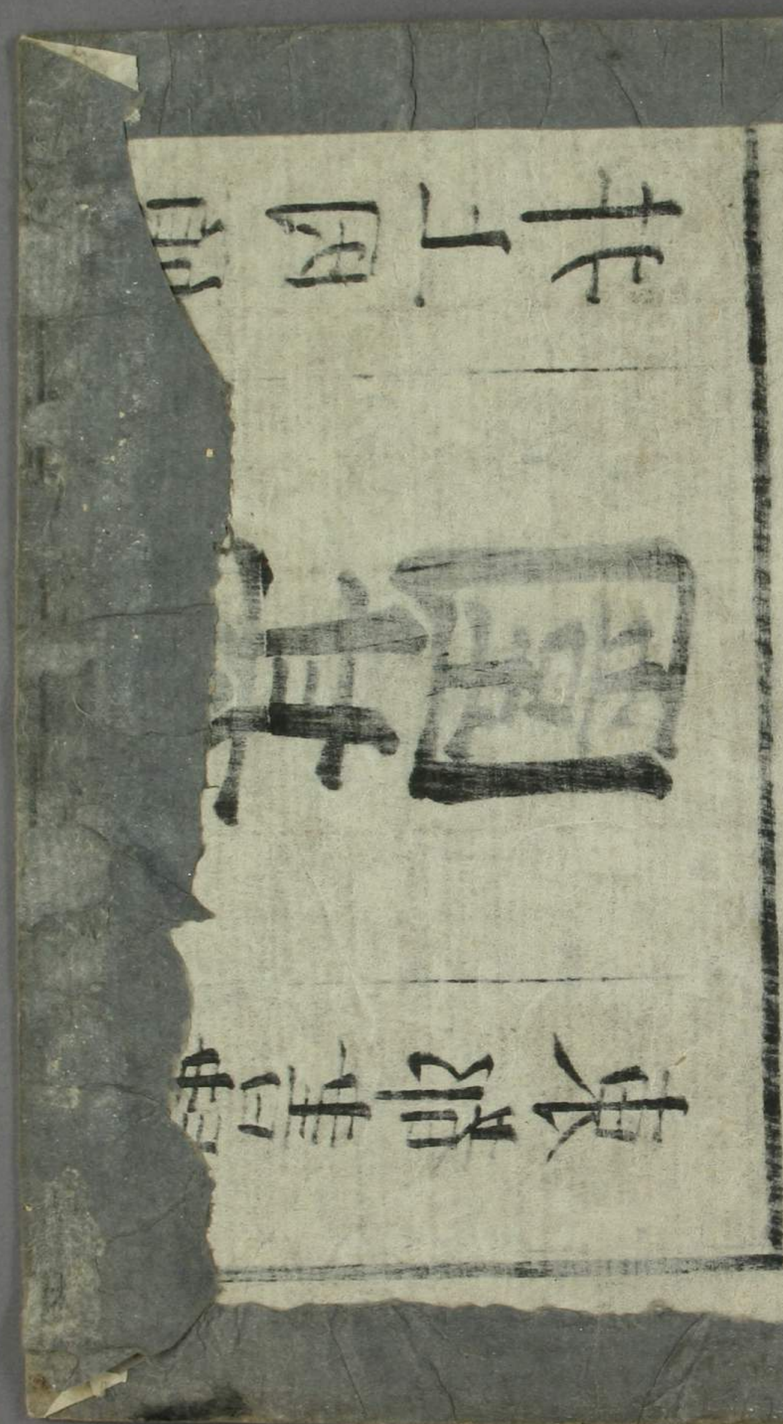
ーををををををををを

をををををををををを

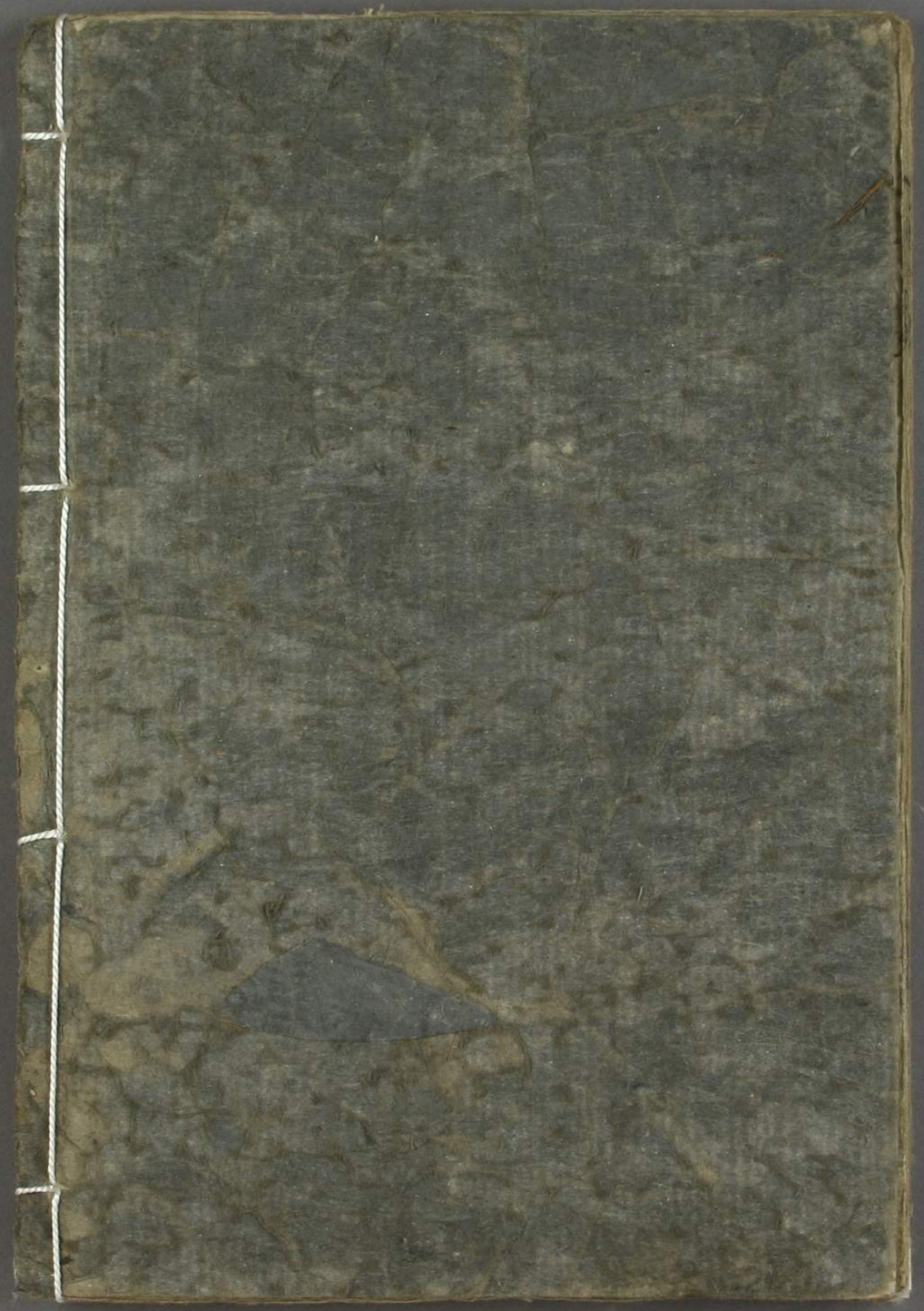
をををををををををを

を

つぎ　わきていまはやくいまはやくとせくやがゆゑにもとめもとめてこそ
ゆゑにもとめもとめてこそのあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろをおきまつ
ゆゑにもとめもとめてこそのあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろをおきまつ
うまずふるうつゝとこゝとこゝにやうのあるこゝろをおきまつ
とのあるのうわゝ〳〵やうのあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろをおきまつ
いとをれば〳〵やうのあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろをおきまつ
とら〳〵やうのあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろをおきまつ
わらゝくもあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろをおきまつ
ゆくさかゆくこゝろ〳〵やうのあるこゝろ〳〵やうのあるこゝろをおきまつ
のある



右十葉

歌川國貞画

筆耕　千形仲道